

新聞記事における「ファンタジー」の研究 —計量的な分析を用いて—

諏訪部 なずな

ファンタジーという文学ジャンルは、神話や伝承なども含む広い範囲を指す言葉として使われているが、これまで児童文学におけるひとつのジャンルとして、文学的なアプローチから数多くの研究がなされている。しかし、作品論や作品史などの研究が一定の成果を上げる一方で、そもそもファンタジーが社会においてどのように受け入れられてきたかについて、実証的な研究が十分になされてきたとは言い難い。このような問題意識から、本研究では新聞記事における「ファンタジー」の取り上げられ方の特徴を、計量的な方法も交えつつ、実証的に明らかにすることを試みた。

ファンタジーはギリシア語のファンタシア (phantasia) に由来するとされ、多くは空想や幻想といった意味で用いられる。また、音楽用語としては幻想曲のことを指す言葉である。文学形式のひとつでもあり、以前は「妖精物語 (フェアリーテールズ)」や「幻想文学」、「空想物語」などと呼ばれていた。近年は、児童文学を始めとする文学作品の他に、映画やライトノベル、ゲームなど幅広い分野でファンタジーは親しまれている。

本研究では以下の3つの調査を行った。1つ目は、従来の研究などを参考に選択したキーワードを使用して新聞記事データベースの全文検索を行い、ファンタジーとそれ以外の文学ジャンルに関する記事について比較しつつ、出現頻度の経年変化を分析した。使用したデータベースは朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、日本経済新聞の4紙のものである。2つ目は、ファンタジーを主題とする記事(記事見出しに「ファンタジー」という語を持つ記事)に限定し、それらを内容に沿って分類して分析を行った。最後に、ファンタジー作品がどのような取り上げられ方をされているのか調査するため、作品批評の記事を分析した。

本調査の結果、ファンタジーに言及する記事は1971年に読売新聞に掲載されてから見られるようになり、1980年代から記事の増加が顕著となること、ファンタジーを主題とする記事のうち作品批評の占める割合が最も大きいことが分かった。また、従来のファンタジーに関する文学研究では、対象の作品はすでに著名な作品であったり、文学的、歴史的な価値のある作品であったりしたが、作品批評の記事において取り上げられるファンタジー作品の分析では新刊書籍が多く取り上げられており、文学研究と新聞記事では取り上げられた作品には大きな違いがあることが明らかとなった。

これらの結果を踏まえ、本研究では、社会におけるファンタジーの受容を実証的に研究することで、文学的研究としての作品論や作品史とは異なるファンタジーの側面を明らかにできることを指摘した。

(指導教員 原 淳之)